

石積遺構からみた古代山城築造技術に関する試論

南 健太郎

はじめに

六六三年の白村江の戦いは東アジア規模の戦乱であり、これを機に中央政権は対外的な防衛政策として九州から都の周囲に至る各地に山城を築いた。このような背景のもと築かれた城は古代山城と呼ばれている。現在までのところ二九の山城が存在したことが知られており、所在地が明らかなものは二十四カ所である。

古代山城は一般的に周囲を見渡せるような高所に築かれており、城内外を画する城壁が廻らされている。中には城壁が全周しないものもあるが、それらは未完成ながら、少なくとも周囲の集落や道路から見える部分は築こうとする意図があったようである（亀田二〇一四）。このような意味で古代山城の存在は地域社会においても重要な機能を果たしていたと考えられる。

このように古代山城の築造は国家、地域社会において重要な位置を占めていたようだが、その築造にあたっての具体的な姿はどのようなものであったのだろうか。古代山城は文献に記録があるものとないものがあり、前者は朝鮮式山城、後者は神籠石式山城と呼ばれている。朝鮮式山城の築城には百濟から亡命してきた人々の関与があつたことを文献から読み取ることができ、実際古代山城の構成や各遺構に朝鮮半島からの情報・技術が活かされていることが看取される。

このように古代山城は列島内部で培われた独自の技術と半島から的情報・技術を融合させて作られたものであるが、各山城の構成・遺構をみると共通する部分もあれば、個性的な部分もある。これは古代山城の築城が国家的な規模で行われたものの、築造者集団がもつていた旧来の技術の相違性が表れているものと理解できるが、各山城間においてどのような部分が共通し、どのような部分が異なるのかを詳細に検討することは、古代山城築造技術の問題を考え上で重要であろう。このことを検討するためにはある程度距離的に離れた地域間での比較が有効ではないかと考える。また各山城にどの程度の個性があるのかを考えるのは、築造者集団がどのように組織され、地域的な技術的な基盤がどのように反映されているのかという問題にも繋がる。

本稿ではこのような二つの課題を念頭に置き、古代山城の築造技術の検討を行う。検討においては石積遺構に着目する（一）。石積遺構は古代山城の主要な構成要素であり、近年の発掘調査成果によつて、朝鮮式山城・神籠石式山城の両者に見られることが確認されている。このため、古代山城の技術比較には格好のもので、特に城門・水門では石積が多用されている。これらの遺構を比較することで上記に問題について検討していく。

一、鞠智城の石積遺構

石積遺構の検討に際して、まず鞠智城でこれまでに確認されている石積遺構を概観してみよう。鞠智城の城郭線は基本的に土塁であり、神籠石式山城のような基部の石列を伴っていない。しかしその中でも限定された場所に石積遺構が築かれているのは、石積遺構の性格を考える上でも興味深い。この点から鞠智城の石積遺構に着目する。

鞠智城の石積遺構は現在までのところ石垣が二ヵ所（三枝の石垣・馬こかしの石垣）、城門が一ヵ所（池ノ尾門）の計三ヵ所で確認されている（第1図）。なお石積遺構で使用されている石材の呼称については、外側向きの面を「表面」として記述する。

①三枝の石垣（第2図-1）

現在の熊本県菊池市の中心部から鞠智城に向かい、八角形建物などに至る道路の脇に位置する。石垣は道路の南面にあり、北面には存在しない。報告書の記述では石垣の長さ約八・三m、高さ四・三m、中央部の傾斜約七五度で、 $50\text{cm} \times 70\text{cm}$ の切石が一五〇～一〇〇段積まれており、石材はほとんどが凝灰岩であるという。なお使用石材には矢が打ち込まれた痕跡も看守される（熊本県教育委員会一九八三）。

実測図からは石材の表面形態が、正方形・長方形・台形・三角形、などさまざまであることがうかがえる。また積み方も横目地が通る個所が限定的で、縦のラインもほとんど揃っておらず、工程上の単位を見出しがたい。

②馬こかしの石垣（第2図-2）

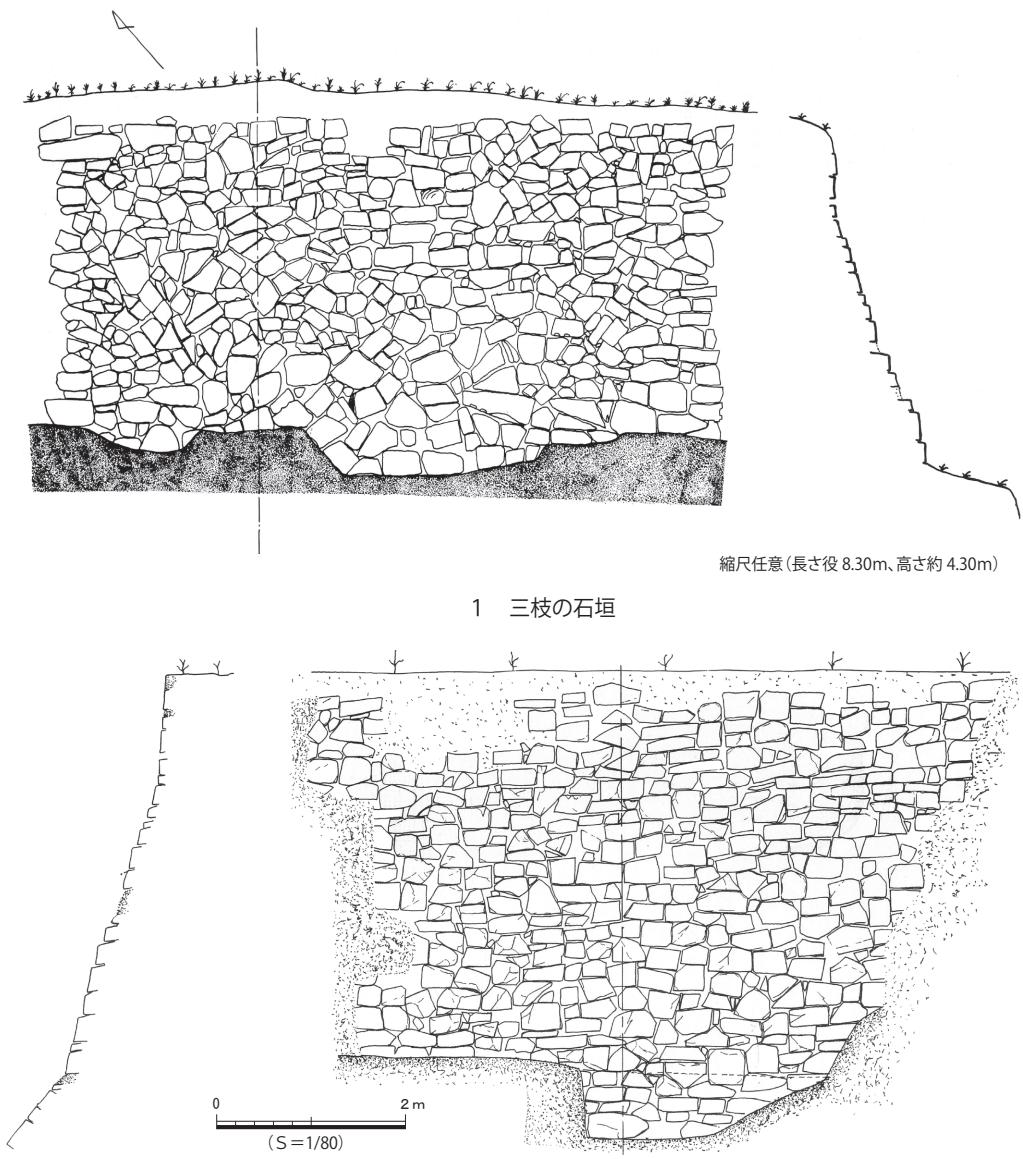
現在の温故創生館から深迫門方面に進む際に通る、幅の狭い道の



第1図 鞠智城における石積遺構の位置

東面に築かれている。報告書ではかなり古い時期に築造されたものと指摘されている。この場所は城の外郭線でも最も幅の狭いところであるが、深迫門から八角形建物のある中心部に向かつては重要な道であつたものと考えられる。報告書の記述では長さ約六・六m、高さ約四・三mが確認されており、傾斜は上から約二mまでやや反り気味、その下約三・八mまでは幾分ふくらみを持ち、それ以下は根固め状に裾を広げている、とされている。石材はほとんどが加工された凝灰岩（一部に安山岩質）で、石垣はほぼ長さ三〇～六〇cm、厚さ一〇～三〇cmの切石がほぼ水平に詰められているようである（熊本県教育委員会一九八三）。

三枝の石垣と比べると、石垣構成石材の表面形態は長辺を横向き



第2図 鞠智城の石積遺構①（三枝の石垣・馬こかしの石垣）

込み遺構、土手状盛土遺構、盛土状遺構が確認されており、須恵器、土師器、瓦などが出土している（歴史公園鞠智城・温故創生館二〇〇六・二〇一一、熊本県教育委員会二〇一二）。門礎石の軸摺穴底部・内壁に鉄錆と考えられるものが付着しており、鉄製受皿などを伴った形で使用されたものと考えられている（歴史公園鞠智城・温故創生館二〇一一・小澤二〇一四）。

石積は石墨や通水溝とそれに連なる導水溝にみられる。それぞれを詳しく見てみよう。

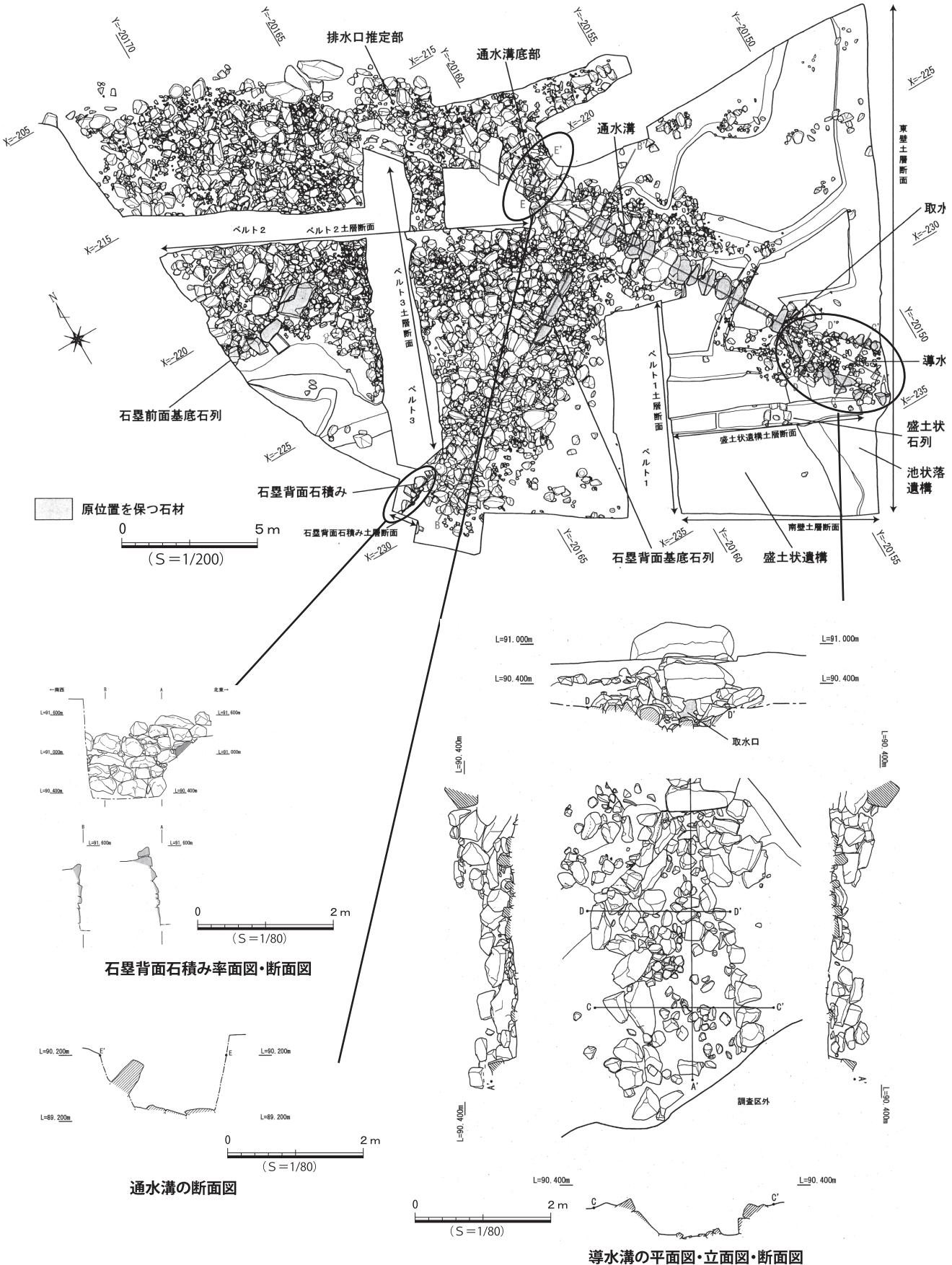
a・石墨

にした長方形が多く、横目地が通るように水平を意識した積み方があなされている。

③池ノ尾門（第3図）

これまでの調査で門礎石、石墨、通水溝、導水溝、池状落ち

用いているという点で異なっている。この点は切石を多用する北部九州の神籠石系山城との相違点でもあり、石積技術を考える上では重要な視点となりうるだろう（坪井一九六一、葛原一九九四、小澤二〇一二）。石墨中央部では石材のサイズが長さ八〇cmを超えてお



第3図 鞠智城の石積遺構②(池ノ尾門)

り、部位によつて石材の大きさを調整したと考えられる。

石積方法は、限られた範囲で確認されたのみであるが、各段において横目地が通つてゐる。これは馬こかしの石垣と共通している。

b. 通水溝・導水溝

石墨にほぼ直交するように全長約一六〇mの通水溝が確認され、城内側にはこれに連接する長さ約四・三mの導水溝が作られている。通水溝は底部に径三〇～四〇cmの扁平な石材が敷かれるが、側壁の構造は板石を立てるところと細長い石材の小口面を内側に向けて数段積みあげるという二通りの構築方法が見られる。通水溝には蓋石があり、横長の大型石材が使用されている。導水溝は蓋石のない開渠型であったようで、側壁は一～三段程度の石積で構成されている。敷石の明確な痕跡は確認されていないが、導水溝内には一〇～三〇cm大の石が散在している。

池ノ尾門では須恵器、土師器、瓦などが出土しており、時期的には七世紀第4四半期から一〇世紀代までの長期にわたる。少なくとも七世紀第4四半期には門が使用されていたことを示している。

このように鞠智城では三ヵ所において石積遺構が確認されているが、その特徴をまとめるに以下のようになる。

- ・石材には切石（三枝の石垣・馬こかしの石垣）と未加工の石（池ノ尾門）があり、前者は高石垣、後者は門という異なる場面での使用状態を示している。特に後者は七世紀代のものであり、北部九州の神籠石式山城とは異なる特徴とすることができるよう。三枝の石垣にある矢が打ち込まれた痕跡は他の石積遺構には見られない。
- ・石積状況は横目地が通るもの（馬こかしの石垣・池ノ尾門）、乱

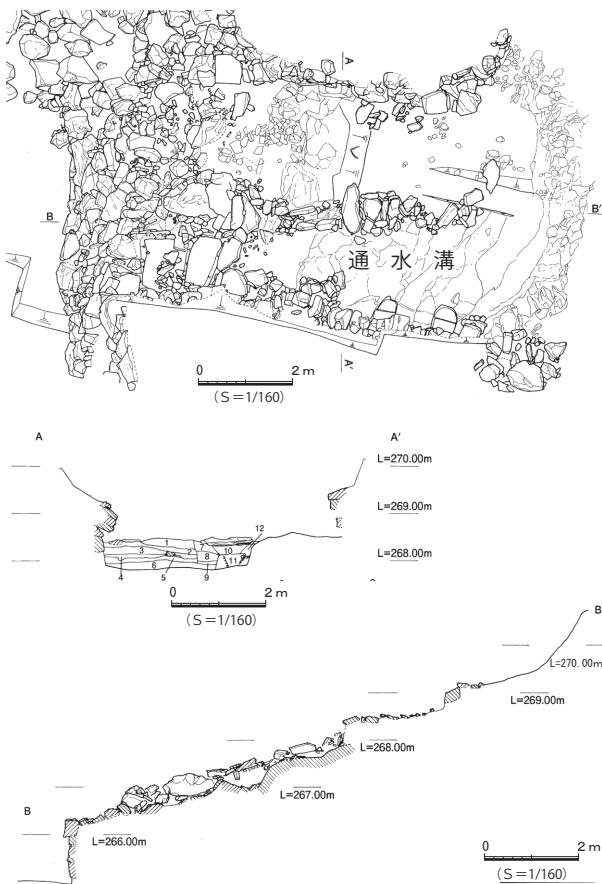
雜に積まれるもの（三枝の石垣）がある。

・池ノ尾門は門礎石が確認されていることから城門として機能していたと考えられるが、通水溝・導水溝があり特殊な構造を示す。通水溝は側壁の構造に二パターンがある。

鞠智城での石積遺構において発掘で確實に古代のものである確証が得られているのは池ノ尾門であり、構築方法の比較も可能な状況にある。

二、城門下部構造の検討

鞠智城の池ノ尾門で確認された石墨および下部構造は、石材の使用状況や石積方法がわかる事例であり、他の古代山城との比較を行



第4図 屋嶋城の城門と通水溝

うことにより、その技術的な関係性について検討する。

池ノ尾門で特に目を引くのは城門の門道に構築された導水溝・通水溝である。西日本の古代山城においてこのような施設はこれまでのところ鞠智城のほかに、香川県高松市屋嶋城、岡山県総社市鬼城山城で確認されている。所在地の明らかな二四カ所のうち三カ所でしか確認されていないことは、このような城門構造を持つ山城の有機的な関係性が想定される。これまでの研究では屋嶋城と鬼城山城の構造的な共通性が指摘されており（山元二〇〇八）、それらの諸要素は朝鮮半島でもみられるものである（亀田二〇〇九）。屋嶋城は朝鮮式山城、鬼城山城は神籠石式山城であり、両者の比較という観点からも検討対象として有益である。そこでまず屋嶋城、鬼城山城の城門構造に触れ、鞠智城とあわせて、それぞれの特徴を比較してみよう。

①屋嶋城

屋嶋城は高松平野から瀬戸内海につきだすようにそびえる屋島に築かれており、瀬戸内海の眺望は抜群である。城門は瀬戸内海とは反対側の南面で一ヵ所が確認されている（高松市教育委員会二〇〇三・二〇〇八）（第4図）。

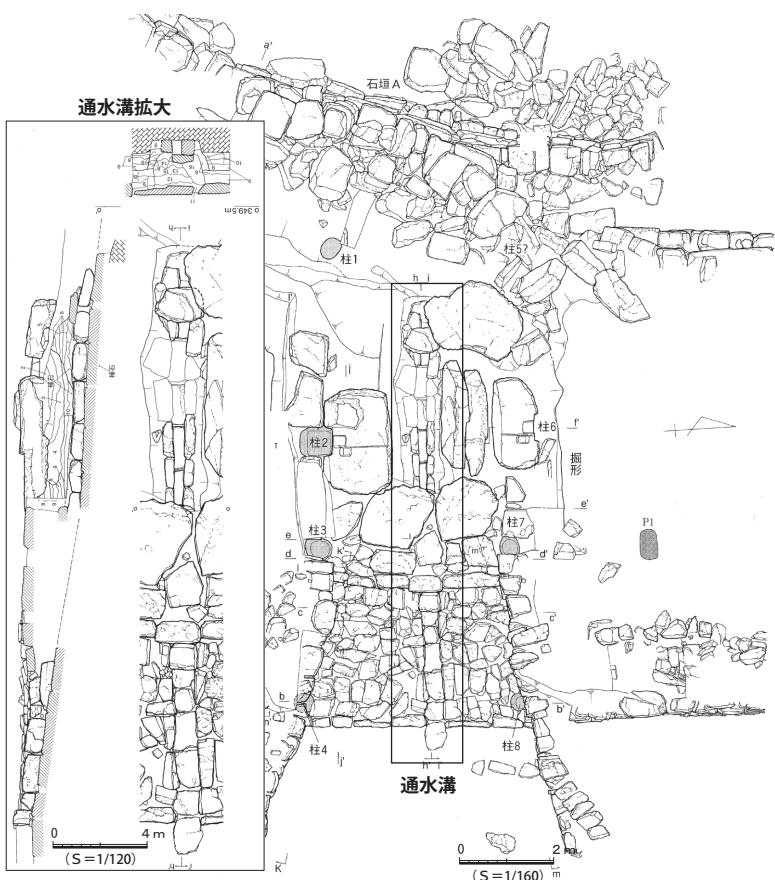
城門の前面には高さ2m以上の前面石垣が築かれている。城門

前面石垣は外郭線石垣と連続し、懸門構造になつていて、城門の床面中央には通水溝がある。通水溝は城門床面と同様に上・中・下の三段に分けられている。上段には蓋石が残存する。中段・下段には蓋石は残存していないが、その連続する部分の一部には残存している。側壁の構造は各段で異なつていて、上段は南側が岩盤、北側が埋土で、中段は板石を両側に立てて側壁としている。

②鬼城山城

鬼城山城は眼下に平野を望む断崖絶壁上に築かれており、遠くに瀬戸内海を見通すことができる。城門は瀬戸内海側（正面）に三カ所（西門・南門・東門）、反対側の背面に一ヵ所（北門）が確認されている（鬼ノ城学術調査委員会一九八〇、総社市教育委員会一九九四・二〇〇五・二〇〇六）（第5図）。

このうち北門で通水溝が確認されている。通水溝は城門の中央部



第5図 鬼城山城の城門（北門）と通水溝

にあり、全体の長さ約一三mで、城内側から中ほどの大形石材が敷かれるところまでは開渠、そこから城外までは暗渠となる。側壁に使用されている石材は細長い形のもので、幅二〇cm前後の面を上面にして、小口側が接するように並べられている。側壁は両側の石材が対になるように大きさが揃えられており、計画的な並べ方ということができよう。床面には上面が平らな石材が敷かれており、側壁の下に敷石が入り込んでいることから、敷石の上に側壁を立てたものと思われる。通水溝の上方では集水枠などの設備は確認されていないが、門道部の奥には枠形状遺構や溝があり、これは正面側に位置する第4水門への排水のためのものである。このため北門下部の通水溝への流水は抑えられていたものと考えられる。

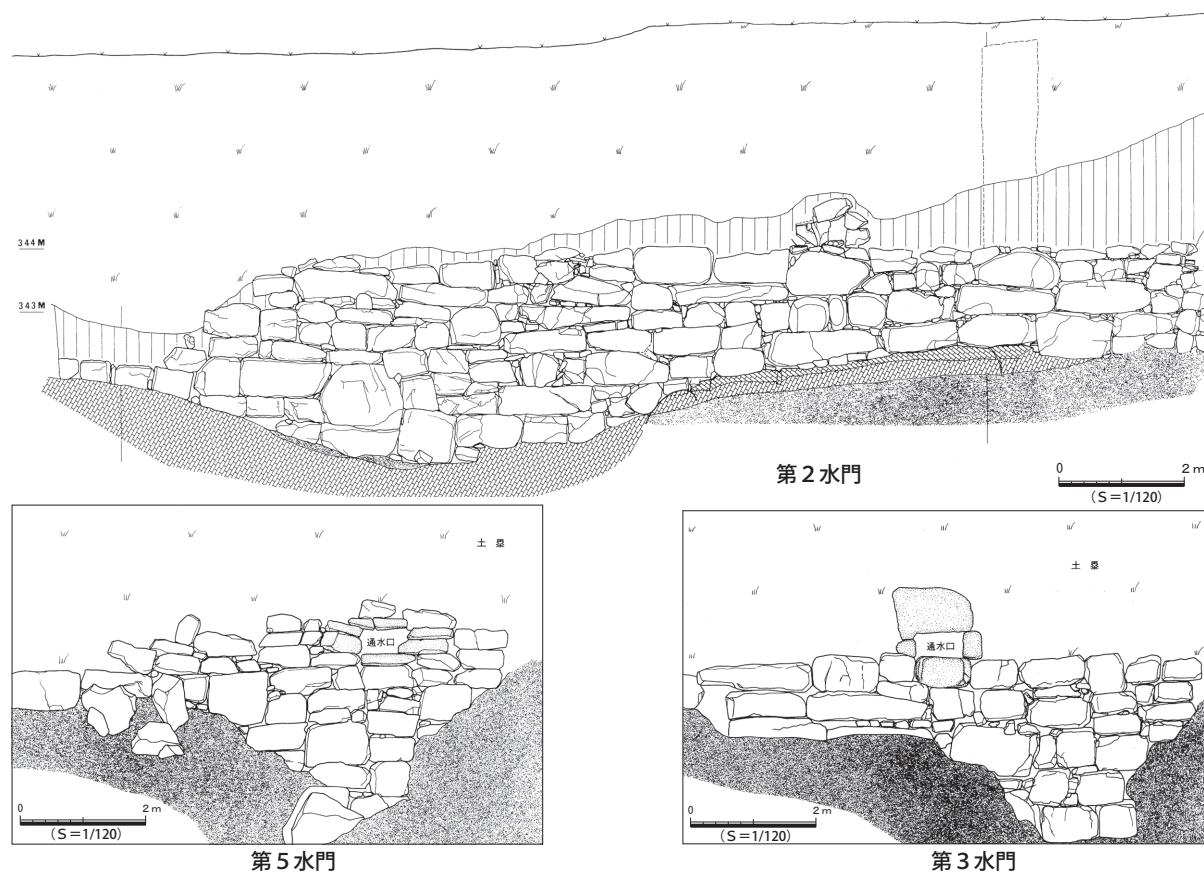
以上、城門の下部に構築された通水溝を見てきたが、ここで諸要素を比較してみよう。

床面 床面の構造は石敷きが鞠智城と鬼城山城でみられ、屋嶋城では岩盤が利用されている。前者でも鞠智城は扁平な石数個を並べることで通水溝内床面が作られているが、鬼城山城では一つ一つがきれいに敷きつめられている。

側壁 側壁もそれぞれに特徴があるが、鞠智城と屋嶋城では石積で構成されるのに対し、鬼城山城では大きさが揃えられた石材が並べられている。屋嶋城では岩盤が側壁として利用されているところもある。

暗渠・開渠 鬼城山城では城門の床面構造と暗渠・開渠の別が密接に関わっており、屋嶋城も懸門構造の城門床面に関連して通水溝も段構造になっている。

このようにそれぞれの特徴を比較すると、側壁の構造では鞠智城

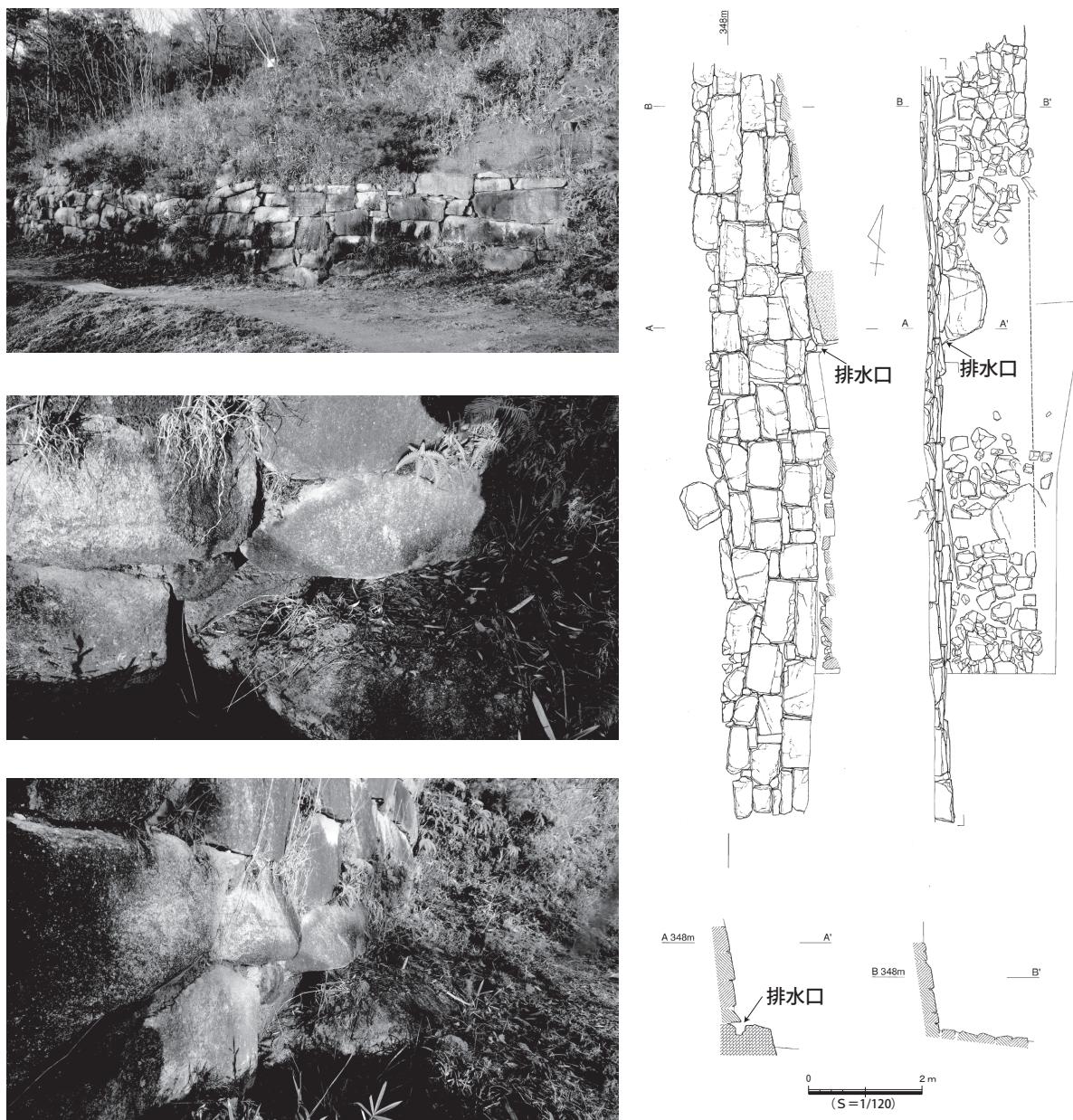


第6図 鬼城山城の水門 A類

と屋嶋城の共通性がうかがわれ、床面については石敷きがみられる点から鬼城山城と鞠智城のつながりを見出すことができる⁽¹¹⁾。城門下部の通水溝の存在が國內ではこの三例に限られることと、このような技術的特徴を共有していることから、これら三城の築造に有機的な関連性があつた可能性が考えられる⁽¹¹⁾。そのような中でも細かい点で各城の独自性もみられることは、それぞれの地域的な技術基盤の違いが反映されているように思われる。

三、水門の構築技術

次に近接する地域に築かれた古代山城においてどのような技術的関連性があるのかを検討してみよう。ここでは瀬戸内海沿岸に築かれた古代山城に着目する。具体的には鬼城山城、岡山県大廻小廻山城、香川県城山城を対象に検討を行う。当地域の古代山城の検討を行うのは鬼城山城の築城に朝鮮半島系の技術が多用されているという点にある（葛原二〇〇五、亀田二〇〇九）。特に水門の構造は特異であり、その構築技術が他の



第7図 鬼城山城の水門B類（第1水門）

城とどのような関係にあるのかという点は、築造技術の系譜や築城者集団の関係性を考える上で重要な点である。

①鬼城山城

鬼城山城ではこれまでの調査で六カ所の水門が確認されている。これらはすべて城域の正面側に位置している。水門の形態には三パターンが認められる。六カ所中三カ所は高所に排水口が設けられるものである（第2～5水門）。これは水門の内と外の高低差が大きいことに起因することが指摘されている（鬼ノ城学術調査委員会一九八〇）。このようなタイプの水門は朝鮮半島でも確認されており、その構築に渡来系集団の関与が想定されている（亀田一九九五・二〇〇九）。これに対し第1水門は水門正面側にわずかにせりだした下部石材の側面から排水するもので、その構造は上記水門とは異なる。また第0水門は西門から東へと続く石垣の折れ部に位置し、基底部から排水されるものである。便宜的に高所に排水口をもつものをA類、第1水門をB類とする。第0水門は谷部に築かれる水門とは異なることからここでは検討から外しておく。

A類 第2・3・5水門が該当する（第6図）。

排水口の上部は土墨によつて覆われるが、排水口が石墨の天端から独立して構築され、天井石の上に直接土墨が築かれる方法（第2・3水門）と、排水口が石墨内部にあり、天井石の上にさらに石材が積まれて、その上に土墨が築かれる方法（第5水門）があることが指摘されている（河本一九八〇）。このような差異は石墨の積み方にも現れている。第2・3水門は横長の巨石を用いて横目地が通るように積まれているが、第5水門は横長の石材がほとんど使用されておらず、横目地が通るのは通水溝底板の下面のみである。このようにA類は構築方法の面

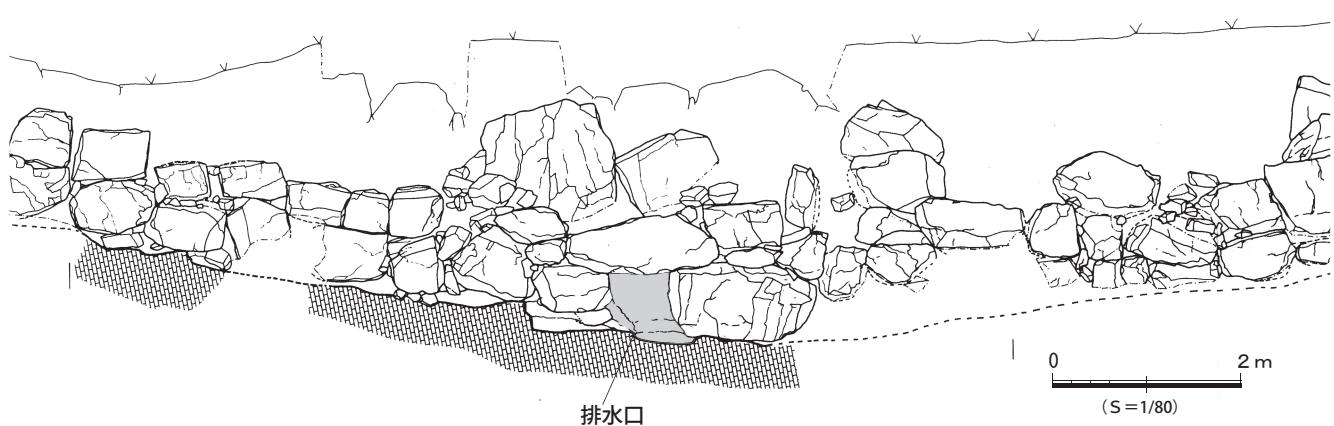
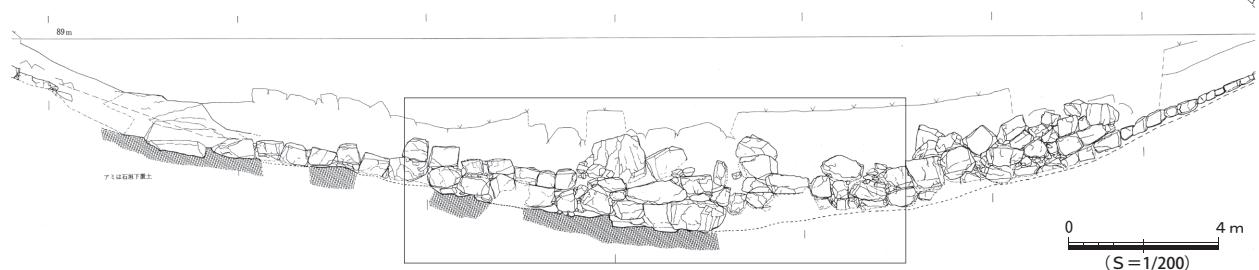
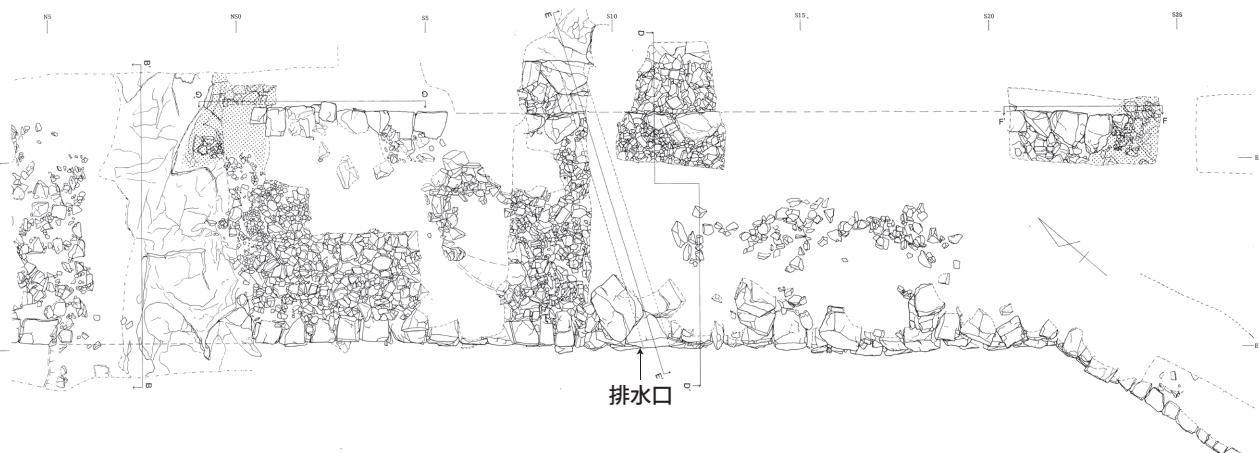
から細分可能であるが、第5水門の全体像が未確定の状況にあるため、ここではこれ以上の検討はひかえる。

B類 排水管の位置は石墨下端にあるが、構造は極めて特徴的である（第7図）。第1水門は前面に敷石があるが、その中に一つだけ大型の石材が用いられている。この石材は西側が石墨の下に入り込むように置かれており、石墨に平行する方向の帯状に剥ぎ取られて溝状に凹んだ部分が確認される。この上部の石材は他よりも少し前面にせりだすように置かれており、溝状部分の蓋石の役割を担っている。石墨は横目地がよく通っているが、排水口部分までが一つの単位になつてているようで、そこから二石、さらに三石の単位があり、それ以南は斜めに目地が通る。排水口までが石積単位の一つの目安になつていたようである。

②大廻小廻山城

城郭線の西面に三カ所の水門があつたと考えられるが、現状で排水口が確認できるのは一の木戸のみである。一の木戸は発掘調査が行われ、城外側の前面石垣、城内側の背面石垣が確認されており、前面石垣は城郭線に伴う石列と連接している（第8図・岡山市教育委員会一九八九）。

使用石材は前面石垣の排水口天井石やその他一部を除いて鬼城山城第1・2・3水門でみられるような横長長方形の石材はみられない。石垣の石積方法は排水口のある中央部とその両側で異なり、構築単位を示しているものとみられている。中央部は通水口の基底石と天井石が積まれ、その側面と上面に石材が組み込まれるような状況を示すのに対し、その両側は谷地形に沿つた一段目とその上部の二段目は成層積みを成し、その上段は上面を水平にする。通水口の

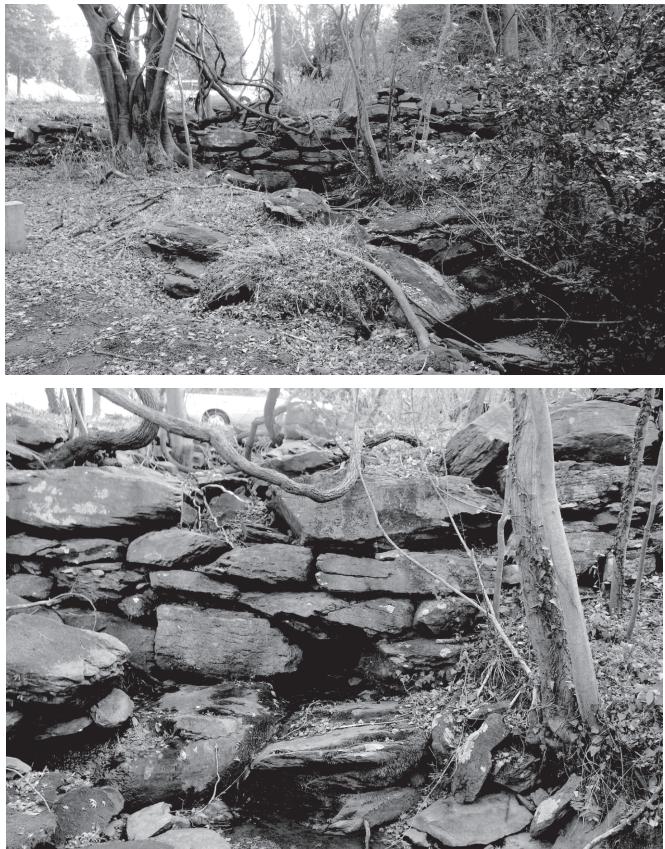


一の木戸排水口



一の木戸全景

第8図 大廻小廻山城 一の木戸（水門）



第9図 城山城の水門

内部に城門・水門を構え、城内各所でホロソ石、カガミ石、マナイヤ石と呼ばれている門礎が確認されている。水門は一ヵ所で、西に向かつて下る谷部にある。現状はゴルフコースの車道で北側が失われているが、南側の保存は良好である。南側から続く石群が谷部の傾斜が緩まるところで東側に曲がり、そこから北側へ伸び排水口部分に至る。

現状では排水口の前面が大型の石によつてテラス状になり、そこから一段下がつたところに水を受ける部分があり、さらに一段下がつて排水される構造になつてている。どこまでが築城当時のものかはわからないが、開口部の構造は元来のものであろう。排水口は側壁と天井石で構成される。側壁は両側とも横幅のある大型の石材であり、天井石は偏平な石材が用いられている。天井石の上部にはさらに二段以上の石積があり、これらの石材には水門構成石材の中でも特に大きなものが積まれている。

積み方に独立性がある点は注意される。

通水口は岩盤上に側壁となる石を置き、その上に天井石をのせる構造である。排水口は石垣の最も標高の低い位置に設けられる。側壁と天井石の隙間には盤状石が咬まされている。側壁の石材は横幅のある大型のもので、鬼城山城でみられた横幅の狭い石材を側壁に用いるのとは異なつてている。これは排水口の上部にも石が積まれるためであると考えられる。天井石の上部には水門を構成する石材の中でも最大級の石が存在する。現状では排水口内部には小型の角礫が充填されており、城内側の吸水口を見通すことはできない。

③城山城
水門は一ヵ所で確認されている。城山城は城域を画する城郭線の

ここまで水門の構造についてみてきたが、ここでそこから読み取ることができる点をまとめてみよう。まず注目すべきは鬼城山城の水門である。地面よりもかなり高い位置に通水溝を設けるA類についてはかねてより朝鮮半島の山城との共通性が指摘されており、構築には渡来系集団の関与があつたと考えられている。また石墨の側面に排水する構造を持つB類についても非常に珍しい構築方法であり、鬼城山城独自の工法ともいえる。鬼城山城築城における工人集團の特異性がかいまみられる。注目すべきは鬼城山城でみられたこれらの工法が大廻小廻山城、城山城ではみられず、後者の二城の構築方法に共通点が多く見出されることである。乗岡実氏は鬼城山城

と大廻小廻山城の水門構造や高石垣の積み方に近似する部分が多いことを指摘している（乗岡一九九二・一九九九）。しかし排水口の設置箇所、側壁・天井石の構造、上部構造には少なからず差異が認められる。排水口の設置箇所については谷部の地形にも左右されているだろうが、吸水口から排水口に流水する過程での水の浸食はその下部へと影響を与えるため、下部に排水口を配するものとは城壁保護の観点から技術的に異なることが指摘されている（亀田一九九五）。その他の点についても構造上の違いと捉えられる。横幅のある大型石材を側壁に用いることは天井石、そしてその上部のさらなる石積を支えるのに必要であり、偶発的に大型の石材が用いられたのではないと考えられる。鬼城山城の水門A類では排水口よりも下部に大型石材を使用されており、水門構築における技術的な差異と捉えることができる。このようなことからは鬼城山城と大廻小廻山城という距離的に近い山城同士よりも、大廻小廻山城と城山城という海を隔てた距離的に遠い山城同士に共通点が多いということを指摘することができる。

四 結語

本稿では石積技術から古代山城間の技術的な関係性を検討してきました。城門下部構造（通水溝）の検討からは、鞠智城、屋嶋城、鬼城山城において、有機的な関係性を見出すことができた。また水門の構築方法の検討からは鬼城山城の技術的独自性と、距離的に離れた地域間の共通性を指摘した。そこから派生する諸点について最後に触れてまとめたい。

今回取り上げた古代山城では鞠智城、屋嶋城、鬼城山城に構造的・

技術的な面で有機的な関連性が見出された⁽³⁾。これに対し大廻小廻山城と城山城は水門構造が共通していることを指摘した。近年、小澤氏によつて行われた築城工法の検討では、朝鮮式山城と九州型・瀬戸内型神籠石式山城の形式内での技術的な差異は大きくななく、築城主体・築城時期は各形式で近接するものということが指摘されている（小澤二〇一二）。一方で、朝鮮式山城である屋嶋城と瀬戸内型神籠石式山城とされる鬼城山城は、通水溝の様相以外にも、懸門構造、通路側面の石垣、角楼の存在というように共通点が多いことが指摘されている（山元二〇〇八、亀田二〇〇九）。角楼は長崎県金田城でも確認されていることは注目され、朝鮮半島の山城との構造上の共通点といえる（亀田二〇一二）。金田城・屋嶋城は六六七年に築城記事がある。鬼城山城の築造時期や築城主体については今後さらに詳細な検討を行う必要があるようと思われる。少なくともこれらの諸城の築造に朝鮮半島にルーツを持つ渡来系集団が関与したものと考えられる。

また古代山城の位置と石積技術の検討結果をあわせて考えると、瀬戸内海両岸における古代山城の築城状況をうかがい知ることができ。つまり北側の鬼城山城と大廻小廻山城の構築技術は根本的に異なつており⁽⁴⁾、南側と比較すると前者は屋嶋城と、後者は城山城と親縁性がみられる。各城の時期的な前後関係を今後詳細に検討することが必要であるが、そこからは地域を越えた築城技術の系譜関係を見出すことができるかもしれない。

本稿では鞠智城とそれに関連する古代山城を取り上げて検討を行つたが、古代山城築城の一端をうかがい知ることができた。しかし今回検討対象としなかつた他城を含めた検討が必要であることは

言うまでもない。それにより古代山城築造の歴史的意義やその背景をさらに立体的に捉えることができると思われる。今後の課題としておきたい。

本稿を草するにあたって以下の方々に多くのご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

大久保徹也、金田善敬、亀田修一、木村龍生、甲元眞之、能登原孝道、平井典子、山口雄治、山本悦世

参考文献

- 稻田孝司 二〇一二「古代山城の技術・軍事・政治」『日本考古学』第三四号
- 日本考古学協会
- 小澤佳憲 二〇一二「朝鮮式山城と神籠石系山城」『日本考古学協会二〇一二年度福岡大会研究発表資料集』 日本考古学協会二〇一二年度福岡大会実行委員会
- 小澤佳憲 二〇一四「古代山城出土唐居敷から見た鞠智城跡の位置づけ」『鞠智城と古代社会』第二号 熊本県教育委員会
- 小田富士雄 二〇一二「鞠智城の創建をめぐる検討」『鞠智城跡II・鞠智城跡第八～十三次調査報告』（熊本県文化財調査報告書第二七六集）熊本県教育委員会
- 岡山市教育委員会 一九八九『大廻小廻山城跡発掘調査報告』
- 亀田修一 一九九五「日韓古代山城比較試論」『考古学研究』第四二卷第三号
- 考古学研究会
- 亀田修一 二〇〇九「鬼ノ城と朝鮮半島」『鬼ノ城と吉備津神社—桃太郎の舞台』を科学する』 吉備人出版
- 亀田修一 二〇一二「対馬金田城小考」『百濟と周辺世界』 成周鐸教授追慕論
- 一九九四・二〇〇一・二〇〇五）。

(三) 完成・未完成という視点からの検討でも鞠智城、屋嶋城、鬼城山城やその他の朝鮮式山城の築城に関連性があることが指摘されている。また築城時期についても完成しているものが先行することが示唆されている（亀田二〇一四）。

(四) 鬼城山城と大廻小廻山城は城郭構造の面からみた実用性・機能に関する違いが見られることが指摘されている（出宮一九七八・一九八四）

亀田修一 二〇一四「古代山城は完成していたのか」『鞠智城跡II・論考編1』

熊本県教育委員会

鬼ノ城学術調査委員会 一九八〇『鬼ノ城』

木村龍生 二〇一二「鞠智城跡出土の土器について」『鞠智城跡II・鞠智城跡第八~三二次調査報告』(熊本県文化財調査報告書第二七六集) 熊本県教育委員会

葛原克人 一九九四「朝鮮式山城」『日本の古代国家と城』新人物往来社
葛原克人 一九〇〇二「備中鬼ノ城の創築期をめぐつて」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会
葛原克人 一九〇〇五「鬼ノ城と東アジア」『古代を考える吉備』吉川弘文館

熊本県教育委員会 一九八三「鞠智城跡」(熊本県文化財調査報告書第五九集)
熊本県教育委員会 二〇一二「鞠智城跡II」(熊本県文化財調査報告書第二七六集)

甲元貞之 二〇〇六「鞠智城についての一考察」『肥後考古』第一四号 肥後考古学会

総社市教育委員会 二〇〇五『古代山城 鬼ノ城』(総社市埋蔵文化財発掘調査報告十八)

高松市教育委員会 二〇〇三『史跡天然記念物天島』(高松市埋蔵文化財調査報告第十六二集)

高松市教育委員会 二〇〇八『屋嶋城跡II』(高松市埋蔵文化財調査報告第一一三集)

出宮徳尚 一九七八「吉備の古代山城試論」『考古学研究』第一五卷第一号 考古学研究会

出宮徳尚 一九八四「古代山城の機能性の検討」『高地性集落と倭国大乱』小野忠淵博士退官記念出版事業会

西住欣一郎 一九九九「発掘から見た鞠智城跡・近年の調査成果から」『先史学・考古学論集』III 龍田考古会

乗岡 実 一九九二「古代山城」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社

乗岡 実 一九九九「吉備の二城をめぐつて」『鬼ノ城と大廻り小廻り』吉備人出版

平尾和久 二〇一〇「古代山城石積考」『古文化談叢』第六五集(二) 九州古文化研究会

山元敏裕 二〇〇八「各調査区の成果」『屋嶋城跡II』(高松市埋蔵文化財調査報告第一二三集)

歴史公園鞠智城・温故創生館 二〇〇六「鞠智城跡 - 第26・27次調査報告 - 報告第一二三集)

歴史公園鞠智城・温故創生館 二〇一一「鞠智城跡 - 第32次調査報告 - 」

挿図出典

第一図 熊本県教育委員会 二〇一二「鞠智城跡II」(熊本県文化財調査報告書第二七六集) 第一図を一部改変

第二図 熊本県教育委員会 一九八三「鞠智城跡」(熊本県文化財調査報告書第五九集) Fig. 一〇・一二を一部改変

第三図 歴史公園鞠智城・温故創生館 二〇一一「鞠智城跡 - 第32次調査報告 - 」第七・九・一一・一五図を一部改変

第四図 高松市教育委員会 二〇〇八「屋嶋城跡II」(高松市埋蔵文化財調査報告第一一三集) 第3図を一部改変、岡山県教育委員会 二〇一三「史跡鬼城山2」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告二三六) 第1図を一部改変

第五図 高松市教育委員会 二〇〇八「屋嶋城跡II」(高松市埋蔵文化財調査報告第一一三集)

出宮徳尚 一九七八「吉備の古代山城試論」『考古学研究』第一五卷第一号 考古学研究会

告第一二三集) 第一一・一二・一三図を一部改変

第六図 総社市教育委員会 一〇〇五『古代山城 鬼ノ城』(総社市埋蔵文化財

発掘調査報告十八) 第六六・七〇図を一部改変

第七図 鬼ノ城学術調査委員会 一九八〇『鬼ノ城』第二五・二九・三二図を一部改変

第八図 総社市教育委員会 一〇〇五『古代山城 鬼ノ城』(総社市埋蔵文化財
発掘調査報告十八) 第五七図を一部改変

第九図 総社市教育委員会 一〇〇六『古代山城 鬼ノ城2』(総社市埋蔵文化

財発掘調査報告十九) 第二三図を一部改変

第一〇図 岡山市教育委員会 一九八九『大廻小廻山城跡発掘調査報告』第四図・

坂出市教育委員会 一〇〇七『坂出市内遺跡発掘調査報告書』を一部改変

第一一図 岡山市教育委員会 一九八九『大廻小廻山城跡発掘調査報告』第

六二図を一部改変

その他は著者が撮影。